

中国(深圳)・モンゴル(ウランバートル)経済視察団報告書

令和7年7月20日(日)～7月26日(土)



令和8年3月



HIROSHIMA KEIZAI DOYUKAI

広島経済同友会

国際委員会

■目 次■

・はじめに	……………	団長 小田 宏史	……………	1
・中国（深圳）・モンゴル（ウランバートル）経済視察団員名簿	……………		……………	2
・中国（深圳）・モンゴル（ウランバートル）経済視察団日程	……………		……………	3
・中国（深圳）・モンゴル（ウランバートル）経済視察 全般を通して	……………	副団長 香川 基吉	……………	4
【中国（深圳）】				
《視 察》				
リコーチャイナ社東莞工場 1	……………	天野 裕	……………	6
リコーチャイナ社東莞工場 2	……………	鈴木 義尚	……………	7
《所 感》				
深圳都市圏における日系製造業拠点及びスマートインフラ	……………	吉田 豊	……………	10
深圳雑感	……………	堂本 英伸	……………	12
深圳の食 1	……………	長沢 伸彦	……………	14
深圳の食 2	……………	金築 等	……………	15
【モンゴル（ウランバートル）】				
《視 察》				
TALKH CHIKHER 社	……………	中野 大輔・山田 淳子	……………	17
モンゴル商工会議所 1	……………	加藤 雅規	……………	20
モンゴル商工会議所 2	……………	小川 満久	……………	22
Khanbogd Cashmere 社 1	……………	高原 哲也	……………	24
Khanbogd Cashmere 社 2	……………	古本 竜一	……………	26
在モンゴル日本大使館	……………	野口 隆志・村上 英之	……………	27
国際協力機構（JICA）モンゴル事業所 1	……………	小林 俊介	……………	29
国際協力機構（JICA）モンゴル事業所 2	……………	松田 哲也	……………	32
《所 感》				
両陛下のモンゴルご訪問、親日感加速	……………	三山 秀昭	……………	36
蒼きモンゴルの夜空	……………	山根 近	……………	38
モンゴルの食	……………	狩野 牧人・松井 健	……………	40
モンゴル雑感 1	……………	榎本 暢之	……………	43
モンゴル雑感 2	……………	廣江 裕治	……………	45
・おわりに	……………	副団長 山本慶一郎	……………	47

～ はじめに～

広島経済同友会
中国（深圳）・モンゴル（ウランバートル）経済視察団
団長 小田 宏史
(株)もみじ銀行 取締役会長

当会では、令和7年7月21日（月）から26日（土）の6日間にわたり、中国（深圳）・モンゴル（ウランバートル）に経済視察団を派遣しました。

最初の訪問地、深圳では、隣接する東莞市にある「リコー マニュファクチャリング チャイナ」を見学しました。この工場は、日本を代表するグローバル企業であるリコーグループにおける全世界向け量産集約およびイノベーションの中核拠点です。

そこで取り組まれている最先端の生産技術や品質管理の高度化はもちろんのこと、環境への配慮、そして、『『はたらく』を歓びにかえる』リコーウェイを頂点とするグループ理念の実践を目の当たりにし、これからの経営にとってたいへん貴重な「気付きや学び」の場になりました。是非とも、この視察を、今後の広島の地域経済や企業経営に生かしたいと思います。

続いて訪問したモンゴルは、本年3月に在広島モンゴル国名誉領事館が設置されたことを契機として実現したもので、多くの参加者が初めて同国を訪問することとなりました。

モンゴルは日本の4倍という広大な国土を有し、古代より続く遊牧民文化が息づいた国です。人口約350万人に対し家畜の数は、何とその18倍余り、6,500万頭にも及ぶと言われており、農牧業は鉱工業とともに主要産業となっています。

私たちがモンゴルを訪れる直前、天皇皇后両陛下が同国を親善訪問されています。1990年代の民主化以降の経済支援や技術協力、さらに近年では多くのモンゴル出身力士が活躍するなど、同国は東～東南アジアでも極めて親日的な国の1つとなっており、交通整理を行う警察官が私たちを見て日本語を話す光景には驚きました。

首都のウランバートル市内では、パン工場とカシミア製品製造工場を視察しました。いずれも慢性的な渋滞に巻き込まれ、当初スケジュールから相当な遅れが発生しましたが、遊牧民という生活スタイルの影響もあるのか、時間に関しては寛容であり、私たちとは異なる感覚を随所感じました。

企業視察以外では、モンゴル商工会議所、在ウランバートル日本大使館ならびにJICA（国際協力機構）を訪ね、モンゴルの諸事情や経済交流・投資の可能性などについて参考になる話を多く聞くことができました。

滞在中は、連日好天にも恵まれました。郊外視察では、巨大なチンギス・ハーン騎馬像を見学した後、遊牧民住居である移動用テント「ゲル」に入ってその暮らし向きを伺いました。

大草原と青空が果てしなく続くモンゴルの郊外風景や遊牧民の生活に、時を忘れるような感覚を抱き、日常の喧騒から離れとても穏やかな気持ちになりました。

この度の海外視察は、出発前夜に深圳行きフライト便の欠航が決まるというハプニングもありましたが、何とかキャッチアップを行い、無事に視察日程を終えることができました。

団長として安堵しますとともに、ご参加いただいた団員各位、視察先の手配などお世話をいただいた国際委員会の皆様や各方面の関係者の方々に対し心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

中国（深圳）・モンゴル（ウランバートル）・経済視察団 名簿

（団 長）

小田宏史 (株)もみじ銀行 取締役会長

（副団長）

香川基吉 (株)福屋 取締役副会長
山本慶一郎 (株)中国新聞社 社主兼専務取締役

（団 員）

天野 裕 (株)アマノ 代表取締役
榎本暢之 (有)エノモト 代表取締役
加藤雅規 (株)加藤組 取締役副社長
金築 等 中国電力(株) 執行役員国際事業部門長
狩野牧人 (株)恵泉ホールディングス 代表取締役
小林俊介 三菱商事(株)中国支社 中国支社長
鈴木義尚 プルデンシャル生命保険(株)広島支社 部長
高原哲也 丸紅(株)中国支社 支社長
堂本英伸 堂本食品(株) 専務取締役
長沢伸彦 (株)たびまちゲート広島 取締役会長
中谷博之 (株)ちゅピCOM 代表取締役副社長
中野大輔 リコージャパン(株)広島支社 支社長
野口隆志 野口ゴム工業(株) 代表取締役社長
廣江裕治 (株)広島銀行 取締役専務執行役員
古本竜一 (株)古本建築設計 代表取締役
松井 健 三井不動産(株)中国支店 支店長
松田哲也 ヒロマツホールディングス(株) 代表取締役会長兼CEO
三山秀昭 広島テレビ放送(株) 顧問
村上英之 三井物産(株)中国支社 理事中国支社長
山田淳子 広島ガス(株) 環境・社会貢献部長
山根 近 久福汽船(株) 代表取締役
吉田 豊 白井汽船(株) 代表取締役社長
小川満久 (株)中国新聞社 経済部記者
谷口康雄 広島経済同友会 事務局長
前田朝子 (株)たびまちゲート広島

※所属・役職は視察時点

◆ 日程表 ◆

日数	月日・曜日	都市名	発着時刻	交通機関	行程	食事
1	2025年 7月20日 日曜日	広島空港 発 羽田空港 着	7:35 9:00	NH672	全日空機で東京羽田へ 羽田⇒深圳 欠航 蒲田 泊	× 夕
2	7月21日 月曜日	羽田空港 発 深圳空港 着 深圳 深圳	11:10 15:10 夕刻 19:00	NH965 専用バス	全日空機で深圳へ (5h00m) 到着 入国審査、荷物受取、税関検査 ホテルチェックイン 夕食：市内レストランで広東料理 (リコー社より5名合流) 深圳 泊	機 夕
3	7月22日 火曜日	深圳 香港 香港空港 発 ウランバートル空港 着 ウランバートル	午前 午後 18:30 23:10 深夜	専用バス OM2972 専用バス	朝食：ホテル 【企業視察】 Ricoh Manufacturing 社 東莞工場 ～11:00 昼食：バス内で弁当 空港へ MIATモンゴル航空機でウランバートルへ (4h40m) 到着 入国審査、荷物受取、税関検査 ホテルチェックイン ウランバートル 泊	朝 昼 機
4	7月23日 水曜日	ウランバートル ツォンジン地区 ウランバートル	10:00 午後 夜	専用バス	朝食：ホテル 【企業視察】 Makh Impex社 (食肉加工 パン) ～11:30 昼食：市内レストランで牛肉料理 郊外視察 (チンギスハーン騎馬像、ゲル、芸術団公演鑑賞) 夕食：市内レストランでモンゴル料理 ウランバートル 泊	朝 昼 夕
5	7月24日 木曜日	ウランバートル	11:00 15:30 18:30	専用バス	朝食：ホテル 【訪問】 モンゴル商工会議所 ～12:30 昼食：市内レストランでモンゴルしゃぶしゃぶ 【企業視察】 KhanBogd Cashmere社 (カシミヤ製造) ～16:30 【表敬】 在ウランバートル日本国大使館 ウランバートル 泊	朝 昼 夕
6	7月25日 金曜日	ウランバートル	9:30 午後 夕刻	専用バス	朝食：ホテル 【訪問】 JICA国際協力機構 ～10:30 昼食：市内レストランで洋食 【現地状況視察】 地元スーパーなど 夕食：市内レストランで中国料理 ウランバートル 泊	朝 昼 夕
7	7月26日 土曜日	ウランバートル ウランバートル空港 発 成田空港 着 羽田空港 発 広島空港 着	4:00 7:45 13:40 14:45 18:20 19:45	貸切バス OM501 貸切バス JL265	ホテル出発し空港へ ミアットモンゴル航空機で成田へ (4h55m) 入国審査、荷物受取、税関検査 空港へ 日本航空機で広島へ お疲れ様でした	× 機 ×

中国（深圳）・モンゴル（ウランバートル）経済視察

～全体を通して～

広島経済同友会
中国（深圳）・モンゴル（ウランバートル）経済視察団
副団長 香川 基吉
(株)福屋 取締役副会長

会員の知見を深めるため、恒例の海外視察に行っていました。今回は大陸アジアに目を向け、近年開発の進むモンゴル（ウランバートル）と、その行程の経由地として中国（深圳）への視察を行うこととなりました。

多くの皆様方のご協力やご支援により経済視察は順調に行われる予定でしたが、何と7月19日出発の前日に「深圳付近を台風6号が接近の為、7月20日深圳空港は閉鎖」の情報が届きました。出鼻をくじかれた我々は戸惑いましたが、とりあえず予定通り7月20日に東京まで行くことになりました。(株)たびまちゲート様のご努力により、20日の東京での宿を確保することが出来ました。

また、翌日の深圳行きの飛行機も人数分確保できたということで、ご努力とラッキーに感謝するだけです。

さて、次に問題になるのが、ぼっかり空いた1日をどう過ごすかです。東京出身の方は実家に帰ったり、個別に行きたいところへ行ったりと、自由な時間となりましたが、我々は何故か高尾山に向かっていました。行ったのは良かったのですが、帰る途中、全国的にもニュースになった山手線でのモバイルバッテリーの発火による、JR運航停止に巻き込まれました。なんと、我々はその列車に乗る予定でした。仕方なく私鉄に乗り、大回りをして無事ホテルに戻ることが出来ましたが、波乱万丈の視察の始まりでした。

1日日程が短縮されたため、21日午前に予定されていた「Ricoh Manufacturing Chaina 社」の訪問は翌日となり、当日はリコー社の皆さんと夕食を共にし、当地でのお話を伺うことが出来ました。

翌日の21日午前、新年特別例会でご講演をいただいた(株)リコーの山下会長とのご縁でご紹介いただいた、最新鋭の「Ricoh Manufacturing Chaina 社」東莞工場を視察しました。最新鋭ということで、機器の配置、従業員への教育、福利厚生関係にも配慮し、かつ古いシステムにも手作業で対処するラインまであり、顧客に配慮した工場になっていることには感心しました。

日程が短縮したことにより、午後の市内視察はキャンセルし、ウランバートルへ向かうべく香港空港に向かいました。まことにハードなスケジュールで、ホテルにチェックインしたのは夜中の1時30分頃でした。

翌日の23日もハプニングから始まりました。当初の予定は、「Makh Impex LLC 社」という食肉工場の視察の予定でしたが、着いてみるとパン工場でした。同じグループということでしたが、何かモンゴルの人々のおおらかさを感じました。

午後にはウランバートル郊外視察ということで、チンギスハーン騎馬像と伝統住居のグルを見学に行きました。さすがにモンゴルを代表する騎馬像で、高さが30メートルもあるそうです。モンゴ

ル人の誇りを伺わせる立派な像でした。

また、ゲルは遊牧民の伝統的住居ですが、思ったより中も広く快適な作りになっていました。伝統をまもりつつモバイルフォンを器用に操る姿は、今後の参考になるかもしれません。

24日午前には、モンゴル商工会議所を訪問し、プレゼンを受けました。輸出の8割以上が鉱石で、名産品のカシミア・革製品はほんの2%位だそうです。午後には「Kahnboged Cashemere社」というカシミア工場を視察しました。世界各国の有名ブランドに卸しており、羽田空港にもショップがあります。

その後、在ウランバートル日本国大使館を訪問し、モンゴルの現状についてのプレゼンとモンゴルへの投資についての話を伺った後、大使館の皆さんと懇談会を行いました。

翌25日にはJICA国際協力機構を訪問し、モンゴルの人々が大変親日であることを知りました。親日は87%、日本への留学者数は人口比で世界一位(2023年)、27%が日本留学希望者だそうです、非常に親しみを感じることが出来ました。

26日は朝の4時40分にはバスに乗り、ウランバートル―成田―羽田―広島と無事生還することが出来ました。

全体を通して深圳では、リコーの山下会長が目指してこられた、「OAメーカーから総合デジタルサービスへ」を体現したようなスマートファクトリーを拝見し、強い志を感じることが出来ました。またモンゴルでは伝統的遊牧民の暮らしを守りつつ、ウランバートルでの生き活きとした近代化へのエネルギーを感じることが出来、我々が無くしかけているようなものを感じました。

この視察を通して、参加者の皆様方の臨機応変な逞しさを感じるとともに、一週間行動を共に出来たことに感謝いたしたいと思います。

◆【視 察】

～リコーチャイナ社 東莞工場（中国・広東省東莞市） 1～

天野 裕
（株）アマノ 代表取締役

この度はRicoh Manufacturing China様の東莞工場を見学させていただき、心より御礼申し上げます。最先端の製造現場を実際に拝見できたことは、私たちにとって大変貴重な学びの機会であり、リコー様の製品に込められた信頼性や価値の原点を実感いたしました。

2020年4月にグローバル集約生産拠点として統合された東莞工場は、最新のデジタルマニュファクチャリング技術と環境先進設備を兼ね備え、品質・生産性向上と脱炭素への貢献を同時に実現されていました。

DXの推進によって、設備から収集されたデータがリアルタイムに分析され、異常検知や予測メンテナンスが可能になっており、これまでの手作業中心の工程が効率的かつ高度に自動化されている点は、まさに製造業の未来像を示すものであり、デジタルツールの活用が市場競争力を強化すると確信しました。

環境に配慮したものづくりの実現という面では、2050年に向けてGHG排出ゼロにするという高い目標を掲げられ、敷地内の太陽光発電やエネルギー管理システム、水の高度再利用といった取り組みは、単なる効率化を超え、持続可能な社会に向けて次世代型ものづくりの可能性を感じました。こうした活動が、環境負荷低減とコスト最適化の両立を図るだけでなく、長期的にはブランド価値向上やステークホルダーからの信頼確保につながることを強く感じました。

印象的だったのは、技術や環境への配慮に加え、「人」を重視する姿勢です。工場を深センから近隣の東莞に移転した際には、従業員の継続雇用を念頭に通勤や生活の利便性を配慮されたと言いました。従業員が安心して働ける環境を整えることこそが、高い生産性や品質を支え、企業の持続的成長につながるという考え方に深く共感いたしました。人材を尊重する姿勢は、社員のモチベーションや定着率の向上に直結するものであり、私たちの企業経営においても大きな示唆を与えてくれました。

最後に、リコー様の企業ミッションである「“はたらく”に歓びを」という言葉が、理念にとどまらず、現場での技術革新・環境配慮・人材重視といった日々の実践を通じて形になっていることを実感しました。だからこそ、結果として生み出されるリコー様の製品やソリューションには、私たちユーザーの働き方や価値観そのものを変える力が備わっているのだと感じました。こうした統合的な取り組みを参考にさせていただき、持続可能な成長に結びつけていきたいと考えております。

この度の見学を通じて得た知見を、今後の事業運営や社会と共創するものづくりに活かしてまいります。改めて、このような貴重な機会をいただきましたことに深く感謝申し上げます。



◆【視 察】

～リコーチャイナ社 東莞工場（中国・広東省東莞市） 2～

鈴木 義尚
プルデンシャル生命保険(株)広島支社 部長

(視察日) 2025年7月21日

(視察の目的)

リコーグループの中国における製造拠点を実際に見学し、自動化や生産性効率の向上に向けた取り組み、ならびに「Zero Defact」「Well-being」などの理念を現場でどのように実現しているかを学ぶこと。

またグローバルな製造拠点における働き方や、マネジメントの工夫についても関心があり、現場の雰囲気や文化の違いを肌で感じることに。

(視察内容)

・工場の概要

2020年4月に操業を開始したリコーチャイナ東莞工場は、リコーグループのグローバル供給の中核拠点である。敷地面積は90,000㎡の大規模施設であり、IoTやロボット、自動化技術を活用したデジタルモノづくりが実践されていた。グリーンビルディングデザイン認証の3スターやLEEDゴールドも取得しており、環境性能も優れている。現場では品質・効率・安全性のすべてに配慮された生産体制が確立されていた。工場内に一歩足を踏み入ると、整然とした空間と独特な機械の稼働音が広がり、「生きている工場」という印象を受けた。スタッフの動線を考慮したゆとりある通路や安全対策が随所に施されていた。スタッフの方が案内して下さる中で、どの工程にも意味があることが丁寧に説明され、理解が深まった。

(自動化の取り組み)

組立・保証・電装・検査など、各工程において自動化が進んでおり、特にロボットと人が共存する設計となっているのが特徴的だった。重量物の移動には自動搬送装置（AGV）が使われ、倉庫や部品供給の工程もほぼ無人で稼働していた。品質検査には多機能な自動検査装置が導入されており、一つの装置で複数のチェックが行われる仕組みになっていた。工程ごとの改善ポイントはパネルでBefore/Afterとして掲示され、現場の工夫が“見える化”されていた。実際に目にしたBefore/Afterの掲示や、リアルタイムで働くロボットアームの動きには驚かされた。静かに正確に作業を続ける様子からは“人が働きやすくなるための機械”という存在意義を感じた。

(安全・働きやすきの工夫)

工場は単なる生産の場ではなくて、環境にも配慮された設計がなされている。建物は中国のグリーンビルディングデザイン認証で最高ランクの「3スター」を取得し、さらに国際的な環境評価LEEDのゴールド認証も受けている。現場の温度や照明にも配慮があり、作業者が快適に作業できる

ように設計されていた。安全に関しては、作業者が無理なく扱えるように設計された補助器具が印象的だった。思い用品の持ち上げには前述のサポートアームが活用されており、体への負担が極力減らすよう工夫されていた。

(印象に残った点と学び)

- ・デジタル技術と自動化を徹底した“未来型工場”でありながら「人が安心して働ける現場づくり」が徹底されていた。
- ・想像以上に自動化が進んでおり、「人がやるべき仕事」と「機会が担うべき仕事」の線引きが非常に明確だった。
- ・作業者の負担軽減や働きやすさへの配慮も徹底されており、単なる効率追求ではなく“人にやさしい現場”の考え方が浸透していた。
- ・生産工程を常に改善し続けている「現場力」に感銘を受けた。検査工程では SpiderBox と呼ばれる多機能検査機が導入されており、一台で複数の項目を同時に測定できる点に驚かされた。また、設備の異常をAIが予測する“予知保全”の考え方も導入されており、トラブルを未然に防ぐ取り組みが進んでいた。

案内して下さったスタッフの方々が、現場で起きた課題とその解決策を嬉しそうに説明して下さったのはとても印象的だった。数字や図表ではわからない、“人が支えている現場”という温度感を感じることが出来た。

(今後を活かしたいこと)

- ・作業視点の工夫（補助器具・動線設計・視認性）はどこの現場でも実践できるため、見直しが必要であろう。快適で安全な環境を整える事を目指したい。
- ・作業の見える化や負担軽減の観点を意識した職場改善を進めたい
- ・機械化・自動化の導入にはコストもちろん伴うが、リスク軽減・品質安定といった長期的効果を見据えた取り組みが重要であると感じた。
- ・改善の成果を共有・実感できるような仕掛け（Before/After の表示など）を取り入れると、さらなる成果を期待できる。

また、今回のような海外の先進的な取り組みに直接触れる事の意義を再認識した。国内にいと見落としがちな視点や、文化・組織の違いから生まれる工夫を見たことで、自分たちを客観的に見直すきっかけにもなった。



(感想)

リコーの製造現場が、単に機械任せではなく「人と技術の調和」を目指して進化していることを実感できた視察だった。現場を知ること自分たちの業務にも「変化と工夫の視点」を取り入れる必要性を強く感じた。現地の空気感、現場の音、作業者の表情など、五感で感じたことは、資料や動画では得られない貴重な情報だった。

国や文化が違っても「よりよい現場を作るための工夫」は共通しており、それぞれが最善を作っている姿勢に触れ刺激を受けた。視察を通して得られた一番の気づきは、“変化を恐れず、現場の声を生かして改善を重ねる姿勢”の重要性である。これはどの業界にも通じる普遍的な価値であり、今後の業務に必ず活かしていきたいと感じている。

◆【所 感】

～深圳都市圏における日系製造業拠点及びスマートインフラ～

吉田 豊
白井汽船(株) 代表取締役社長

1. 視察目的

本視察団は、急速な都市発展を遂げる深圳市において、日系企業の製造拠点の運営実態および、最先端の都市インフラ整備の状況を把握することを目的とし、現地視察を実施した。深圳は中国国家戦略「粵港澳大湾区」の中核として位置付けられ、テクノロジーと都市統治の融合が進む国際都市である。

2. 主な訪問先

(1) Ricoh Manufacturing China Ltd. (理光創想智造有限公司)

所在地：深圳市郊外工業団地

概要：日本のリコー株式会社が設立した現地法人で、複写機・プリンター等の製造を中心とするスマート工場。

特徴：最新の自動化設備と省人化ラインの導入が進んでおり、中国人技術者の自立的運営と、日本流の品質管理手法が共存するハイブリッド型製造拠点となっていた。



(2) 蓮塘口岸 (Lian Tang Port)

概要：香港と深圳を結ぶ新たな陸路国境ゲート。税関・公安・交通インフラが統合され、高効率な出入境管理を実現している。

所感：ゲート運営には高度な都市管理システムが組み込まれており、国家統制と先端技術による社会インフラの両立が確認できた。

3. 所見・印象

深圳宝安国際空港に到着した瞬間から、建築美と IT システムによる都市設計の完成度の高さを実感。

市内の移動では、EV 車両やスマートバス停、顔認証インフラ等が生活に溶け込んでおり、都市全体が「デジタルで呼吸している」印象。

Ricoh 工場では、従来の OEM 型海外展開を超えて、現地自律型の製造管理・研究開発機能が確認された。

蓮塘口岸では、国境ゲートであっても極めて合理的かつ整然とした交通管理が行われており、中

国の社会統治モデルの一端を実地で体験できた。

4. 総括

深圳はもはや「製造の街」に留まらず、「都市機能・テクノロジー・国際競争力」を兼ね備えた先進都市として、世界的に注目を集めている。今回の視察を通じて、日系企業の現地適応力、都市設計の革新、国家レベルでの統治システムが有機的に連携している様子を確認した。深圳の動向は、我が国の産業戦略・都市政策にとっても重要な示唆を含むものである。

◆【所 感】

～深圳雑感～

堂本 英伸
堂本食品(株) 専務取締役

2010年、深圳のAEONを仕事で訪問して以来、15年ぶりの深圳訪問となった。

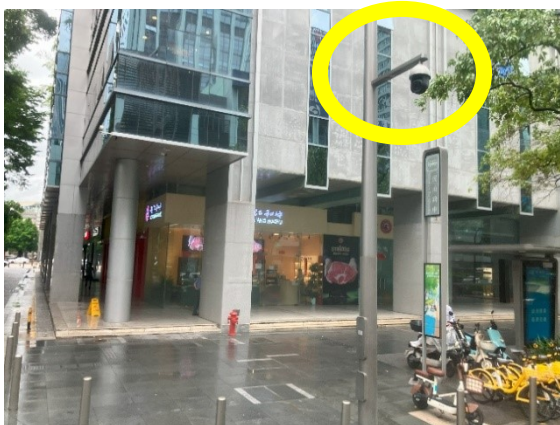
一番驚いたのは、町自体がとても綺麗だったことだ。海が近いからか、台風が通過した後だからなのか、中国内陸地特有の埃っぽさや独特な匂いがなく、空気がとても澄んでいた。道路もきれいに整備され、ゴミが散乱していることもなかった。驚きだった。

また、気になったのは、市街中心部は街灯1台置きに監視カメラが着いていたことだ。高速道路は500mおきくらいだろうか。自動車、バス、トラック、タクシーが通るたびに、日中でもよくわかる位「ピカッ」と光って後方のナンバープレートが記録されていた。個人の行動すべてを監視されているようで嫌ではないかと私は思ったが、中国に住む方に聞くと、交通事故が激減したのでメリットの方がとても大きい、という回答だった。

実際に見ることはできなかったが、D i d iでタクシーを呼んだら、無人タクシーがくるとか、Uber Eatsのような食事の宅配を頼むと、ドローンでデリバリーしてくれるサービスもあるらしい。しかも配送料は20円くらい。ドローン専用ボックスまで届けてくれるようで、そこまで取りに行く必要があるが、この価格メリットは大きいと思う。

BYDのおひざ元と伺っていたので、さぞ多くのBYD車が走っていると想像していたが、あまり見かけることができなかった。2035年には新車のガソリンエンジン車は中国では発売禁止になる。あと10年しかないが、それまでに充電設備設置の整備は急ピッチで進んでいくのだろう。

行程変更が頻繁に発生し、変化対応が常に求められる状況となり、都度自分だったらどのような対応をとるか、考えさせられるとても勉強になる視察でした。小田団長をはじめ事務局の方々には大変お世話になりました。ありがとうございました。





監視カメラの数々

◆【所 感】

～深圳の食1～

長沢 伸彦

(株)たびまちゲート広島 取締役会長

台風の影響で深圳の滞在が1泊となり、着座での食事が夕食、朝食それぞれ1回となったため、ホテル朝食会場での中国料理ブースの様子とガイドの譚さんに伺った深圳の食についてレポートしたい。

まずは、朝食会場の様子から。中国料理ブースには麺、お粥、卵の各コーナーがあり、それぞれのスタッフがテキパキと対応していた。麺コーナーは、まず具材の選択から。キクラゲ、油揚げ、モヤシ、香茸、魚、牛肉の切り身などから好みを選んで白菜など葉物を追加、ボウルに移して麺（通常の麺、米粉麺、平麺）を示して同時に湯がいてもらう。これにスープを入れてもらえば完成。スープは豚骨風だが、中国特有の薬味を加えたせいか少し癖がある感じだ。次に定番のお粥コーナー。ピータン、牛肉、エビ、厚揚げ、魚、豚肉の切り身などから好みを選んで白粥を加えて煮込んでもらうと完成。この白粥はチキンベースであっさりして美味だった。

さて、ここからは、ガイドの譚さんに伺った最近の深圳の食について。まず一般的な市民の朝食については、麺が定番で「白米飯」はほとんど食べない、その代わりが粥、ワンタン、パンになるそうだ。

また、朝食は家でとることは稀で外食が多いということだ。サラリーマンは会社の周辺や地下鉄の入り口にある小さなお店や朝食のチェーン店（お粥屋、パン屋など）をよく利用するが、週末はレストラン「早茶」でエビ餃子などの広東点心をとることも多いらしい。

次に、深圳料理の特徴について尋ねると、「基本的には広東料理の一分派ではあるが、全国からの移民の影響を受けて、広東の味をベースに全国に溶け込むスタイルではないか」ということだった。ただ、沿岸部では牡蠣やウニなど海鮮物を素材にした炒め料理があり、少ないながらも伝統的な深圳料理のひとつといえるそうだ。

また、深圳や中国国内における近年の食文化の変化については、まずビジネスアワーの拡大によって夕食時間が19:30～21:00に大幅に遅くなったこと、味付けが「多油多塩」から「少油少塩」になったこと、テイクアウトやネットデリバリー、インスタント料理の割合が大幅に上昇していることと聞き、日本との共通点も見いだせる。

最後に外国人に一番のおすすめの深圳の食を尋ねると広東式朝飲茶、特にエビ餃子、シューマイ、春巻は絶品とのこと。今度深圳を訪ねる時はもっとゆっくり食してみたい、と思えた瞬間だった。



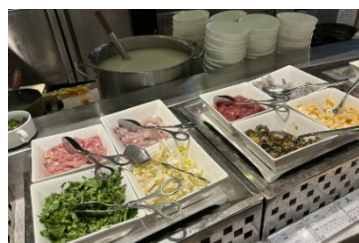
麺コーナーの具材選択



麺コーナーの麺選択



お粥コーナー。
右奥には麺コーナー



お粥コーナーの具材選択。
寸胴鍋に粥が見える。



調味料。パクチーやX
O醤など好みを入れて
味変も楽しめる。

◆【所 感】

～深圳の食 2～

金築 等
中国電力(株)
執行役員 国際事業部門長

1. はじめに

7月20日の羽田発ー深圳行きのフライトが中国への台風直撃により、キャンセルとなった。当初の行程では、深圳で2泊し、深圳での外食が3回予定されていたことから、深圳の食についてバラエティに富んだレポートが書けるものと思っていた。

しかしながら、フライトのキャンセルにより、深圳での行程が短縮となり、レストランでの食事は夕食1回だけとなった。この貴重な1回の食事についても紹介するが、帰国後に収集した深圳の食に関するトピックスを含めて所感をお伝えしたい。

2. 深圳の歴史

深圳の食について述べる前に、深圳の歴史を紐解かねばならない。

深圳は中国の南部の都市で、香港の北に位置する。1949年に中華人民共和国が成立した時代、深圳はまだ小さい漁村であったが、1978年に鄧小平による改革開放政策によって、深圳は最初の経済特区の一つに選ばれ、1979年に正式に特区に指定されると、1980年代には驚異的なスピードで経済成長した。以降、多くの外国企業が進出するとともに、人口も急増し、現在は約1,800万人の大都市に変貌を遂げている。また、現在の深圳は、中国における革新的な技術のハブとなっており、「中国のシリコンバレー」とも称され、ファーウェイ、テンセント、BYDなどの巨大企業が本拠を構えている。

このように、短期間に小さな漁村から国際的な大都市へと成長したことから、食の文化という面で言えば、深圳独自の伝統的なものがあるわけではなく、広東エリアの一地域として、広東料理が深圳の食の基盤となっていると言ってよいようである。

実際、深圳の食の特徴は何かと現地で訊ねたところ、深圳自体は比較的新しい街であるため、特に特徴はなく、基本的には広東料理とすることができるとのことであった。

3. 深圳の食について

上述したとおり、深圳の食の基本は広東料理であることから、一般的に言われているとおり、野菜、海産物を中心とした食材で、素材の風味を生かした繊細な味付けのものが多く、日本人に合う比較的薄い味付けの料理と言えそうである。ちなみに、広東料理は、中国八大料理の一つで、味が繊細で素材の風味を生かすことに重点を置くようである。

ホテルの周辺を散策する時間が少しあったが、多様な文化と人々が集まる国際都市であるため、レストランは多種多様な店があり、その料理も多様性に富んでいると感じた。つまりは、多様な食文化の融合により、中国国内の各地域の料理はもとより、日本を含む世界各国の料理を楽しめる

街になっている。共通するのは、海に近く新鮮な海産物が豊富に手に入ることから、シーフード料理が多いということである。

視察団が訪問したレストランも、まさしく広東料理の店で、中華のコース料理をいただいた。テーブルの上に置かれた中国語のメニュー表には13種の料理が記載されていたが、チキンや牛肉の料理もあるものの、多くは海産物と野菜が様々に工夫して調理され、油は少なく薄味のヘルシーと思える美味しい料理が多かった。

最後に、私が美味と思った2品（海鮮料理）の写真を添付させていただく。



◆【視 察】

～TALKH CHIKHER（タルフチケル）社～

中野 大輔
リコージャパン(株)広島支社 支社長
山田 淳子
広島ガス(株) 環境・社会貢献部長

～ はじめに ～

それは青天の霹靂でした。

当初、Makh Impex 社（食肉工場）での食肉の加工に関わる視察を予定しておりました。

到着後は迎賓館のようなエントランスに誘導され、お菓子の家に迷い込んだかのような可愛らしいスイーツとカフェでおもてなしを受けました。その後見学に入るも、なかなかお肉に出会うことができず、代わりに香ばしい匂いがしてきたと思ったら、パン工場の視察が始まり、この頃全員がようやく異変に気付きました。

実は、当日になって Makh Impex 社工場にメンテナンス作業が入ることが決まり、代替先として急遽 Talkh Chikher 社に見学先が変更になったとのことでした。



～TALKH CHIKHER 社について（概要）～

- 設 立：1984年7月（当時は国営、1999年に完全民営化）
- 所 在 地：ウランバートル市 ソンギノハイラハン地区
- 従業員数：約700人（現地ヒアリングによる）、内工場内勤務220人（10%がアルバイト）
 - ・ 工場の従業員は35歳以上のベテランが多い
 - ・ 若年層はセールス、マネジメント職に就く人が多い
- 主要製品^{*1}：パン（20種類以上）、ペストリー（30種類以上）、クッキー（10種類以上）、キャンディ（2種類）、マーマレード、チョコレート（10種類以上）
- 業 績：売上高128,901百万MNT/純利益8,459百万MNT（2024年12月期レート1,000MNT/41円）
- モンゴル最大の食品製造企業の一つで、パンの製造で国内トップのシェア
- モンゴルの製パン業界は、国内の食文化に深く根付いた重要な産業の一つであり、パンは主食の一つとして広く消費され、都市部・地方部を問わず需要がある
- モンゴルの小麦については、ほぼ自給を達成しているものの、干ばつなどの影響も有り、ロシアや中国からの輸入に頼ることもあるが、Talkh Chikher 社では国産小麦を使用して生産している



～視察について

(1) 高度な自動化と効率性

6つの製造ラインが24時間体制で稼働しており、年間90トンのパンを生産している。

欧米・アジア諸国との技術提携により、先進的な製造技術を導入しており、製造ラインは非常に整然としており、各工程の自動化が進んでいた。コンピューター制御による流れ作業で、スライス・



包装まで一貫して行われており、人の手を最小限に抑えながらも高品質な製品を大量に生産している様子が印象的であった。特に、パンの成形から焼成、冷却、包装までが一貫して流れるように進行しており、無駄のない動線設計がなされていると感じた。

(2) 衛生管理の徹底

最新の国際基準に準拠した製造設備を導入しており、衛生管理が徹底されている。品質管理部門では、製品の安全性と品質を確保するための定期的な検査が行われている。また、見学者は入場前に白衣・帽子・靴カバーの着用を義務付けられ、製造エリアは清潔に保たれており、異物混入防止のためのゾーニングも明確にされていた。食品安全に対する企業の真摯な姿勢が伝わってきた。

(3) 働く人々のプロ意識

現場で働くスタッフは皆、自分の役割に誇りを持っている様子が見受けられた。見学中に質問をすると、丁寧に説明してくださり、製品や工程に対する深い理解と責任感が感じられた。

(4) 地元への貢献意識

単なる製造企業ではなく、地域社会とのつながりを大切にしている企業であるという印象を受けた。地元の若者を対象とした職業訓練や、学校給食へのパン提供など、社会貢献活動にも積極的に取り組んでいる。

(5) その他

- 国内への物流は、大きな店舗（直営）へ流通させ、朝の8時までに配送。デパートなどにも出店している。小売店は直営店から出荷している
- もともとは食パンのみの製造だったが、設備投資し新製品を出すことで売り上げ増大に寄与している（需要も増加している）
- ISOの取得により、大手海外フランチャイズに対して納品できている（信頼が得られている）



～所感～

単なる食品製造企業にとどまらず、技術革新・品質管理・社会貢献の面で非常に高いレベルにあることが感じられた。特に、国際基準に準じた製造体制と、消費者満足度を重視したマーケティング戦略は、日本企業にも参考になる点が多くあった。

～ おわりに ～

製造ラインの見学の後は、予定していたレストランでの昼食も変更され、迎賓館のようなエントランスで、スープとパンと肉の美味しい昼食でもてなされましたが、報告書担当の二人は、しばらく食事もしよちのけで、報告書作成のために現地の担当者を質問攻めにし、無事見学を終えたのでした。

快く答えてくれたご担当の方、そして急遽の変更にも円滑にご対応いただき、このような貴重な場をご提供いただいたご関係者の皆さまに、心より感謝申し上げます。



◆【視 察】

～モンゴル商工会議所 1～

加藤 雅規
(株)加藤組 取締役副社長

7月24日(木) 6:00起床 今朝も朝日が眩しい。

今日はモンゴル商工会議所とカシミア工場、それに夕方は日本大使館への表敬訪問である。

10:40 商工会議所へ到着。

マグナイバートル会頭からモンゴルの貿易と海外からの投資対象として力を入れている分野についてお話を伺った。

ウランバートル商工会議所では100人のスタッフが10の部署に分かれており、国内では21の県支所へそれぞれ50人のスタッフが働いている。

モンゴル商工会議所は60年を超す歴史があり、現在の会員数は6,500社を超える。

商工会議所では他国との経済連携、官民の連携、海外進出を計画する企業の支援に力を入れている。モンゴルと日本は2016年に経済連携協定を締結しており、現在ではほとんどの品目の関税が撤廃されていると思われる。モンゴルの経済成長は依然右肩上がりであり、GDPは2020年から2倍以上伸びており、一人当たりのGDPは約100万円である。

現在、石炭の市場価格が下がっているのが懸念される場所ではある。

モンゴルの輸出物は鉱物と非鉱物に分けてあり、2024年の総輸出額は158億ドル、日本円で2兆3千億円。そのうち鉱物資源が147億ドルで92.8%を占めている。最も多いのは石炭の85億ドルで、ほとんどを中国へ輸出している。他には銅、金、鉄鉱石、亜鉛、原油、蛍石、モリブデンがある。

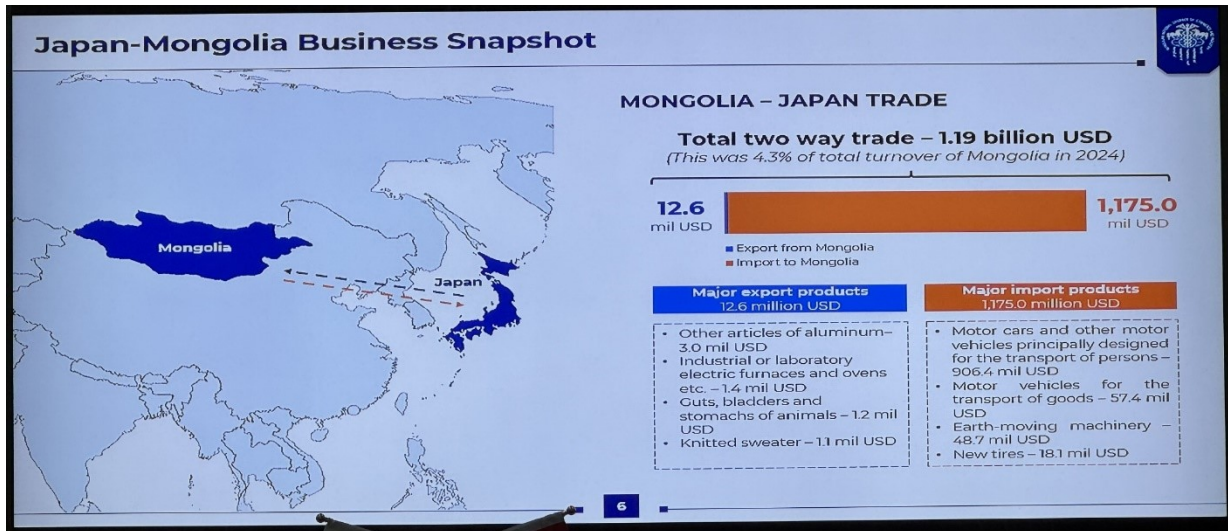
非鉱物の輸出物は、残り7.2%の11億ドル。カシミア、食肉、食用油のシーバックゾーン、松の実、薬草など。特にモンゴルは草原地帯、砂漠地帯、森林地帯など環境が多彩なため、実に500種類の薬草が採れる。

輸入総額は116億ドル、日本円で1兆7千億円。

その内、食品以外が104億ドルで90%を締め、ガソリン、自動車、トラック、電力、携帯、医薬品、建設機械、タイヤ、コンピューターなどである。



食品の輸入は12億ドルで10%。内訳はお酒、小麦、米、野菜、乳製品、油、肉製品など。



対日貿易は総額11億9千万ドル。

輸出は1,260万ドルで、アルミニウム、電気炉やオーブン、動物の腸（ケーシング）、カシミア製品。

輸入は11億7500万ドルで、ほとんどは自動車、その他トラック、建設機械、タイヤ。

また、外国人投資家へも積極的に投資を呼び掛けている。

投資対象としては、鉱業と天然資源、銅と希土類、鉄道の近代化などである。

日本からの投資額は今のところ世界7番目。

モンゴルではスマートフォンが80%以上普及しており、モバイルバンキングやQR決済などのデジタル化が進展している。

しかしその反面サイバーセキュリティが脆弱であり、サイバーセキュリティ企業への需要が高まっている。そのため政府は将来のIT分野の人材不足に備えてデジタル人材の教育を行う企業に対する支援にも力を入れている。実際、ホテル近くのコンビニでは、アイスとコーヒーを買うのに現金は使えずカード決済であった。ちなみにコンビニのホットコーヒーが一杯190円で日本とそれほど変わらない。

今回の視察で訪れたモンゴルは、7月という最も暑いはずの季節にも関わらず、まるで冷房が効いているかのような涼しさである。1年のうち良い季節は約半年ほど、10月からはまた厳しい冬が訪れると思われる。

この短い夏の夜に集って楽しむ若者達や海外に目を向けて研鑽する者の多さ、また多くの家畜を連れて移動を続ける遊牧民に触れることができたおかげで、モンゴルの益々の成長とともに、伝統的な放牧のサイクルがこれからも続いていくであろうということを感じることができた。それは、全般的に担い手不足の日本に比べ、若者の人口比率が高いことと、住宅地にもかかわらず敷地内にゲルを構える世帯の多さから、経済成長の可能性と共に遊牧生活へのこだわりを感じたからである。

深圳もモンゴルも初めて訪れたが、両国の理解につながる価値ある視察であったと思う。

◆【視 察】

～モンゴル商工会議所 2～

小川 満久
(株)中国新聞社 経済部記者

7月24日、モンゴル商工会議所で、マグナイバートル会頭から商議所の組織体制やモンゴル経済・貿易の概況、今後の経済展望について説明を受けた。詳細は以下の通り。

【商工会議所について】

モンゴル最大の経済団体で、6500社がメンバーとして所属する。本部に12の部署があり、約100人のスタッフが働く。全国の21のアイマク（県）ごとに支店があり、輸出や輸入に必要な手続き、著作権の取り扱いなどの行政サービスも一部提供する。

【モンゴル経済、貿易の概況】

- ・モンゴルの2024年のGDPは80兆トゥグルグ（236億米ドル）。サービス分野がトップ、鉱山関連が続く。実質成長率はコロナ禍の2020年にマイナス4・6%だったが、その後は成長が続き、24年はプラス4・9%だった。
- ・24年のモンゴルの貿易総額は274億米ドル。内訳は輸出が158億米ドル、輸出額116億米ドル。輸出のメインは鉱物資源で93%を占める。その他の輸出品はカシミヤ、果物、ナッツ類。輸入品はガソリン、自動車、アルコール、ジュースなど。
- ・対日本の貿易総額は11・9億米ドル。輸入が98%で輸出は2%。輸入品は自動車、自動車部品など、輸出品はアルミニウムなど。



【今後の経済施策】

①マイニング②インフラ整備③ICT・イノベーション④農業・オーガニック製品の4分野に力を入れ、貿易拡大、投資の誘致、ビジネス環境の整備などに力を入れる。

【感想】

中国、ロシアの両大国に囲まれたモンゴルは、特に中国から有形、無形の経済的圧力を受けていると、ある現地関係者から聞いた。しかしマグナイバータル会頭はそんな内情は微塵も出さず、貿易面について「中国などから阻害されたことはない」と言い切っていた。モンゴルが両国との良好な関係を維持しつつ、貿易先の拡大を通じて経済的自立を目指そうとするしたたかな一面を垣間見た気がした。

マグナイバータル会頭は一方で、13世紀のチンギス・ハン時代に国際的な貿易拡大に貢献した歴史にも言及した。今は中国、ロシアの影に隠れているが、モンゴル帝国時代の矜持を胸の奥に持ち続けているように感じた。

モンゴルには豊富なレアメタル、レアアースが埋蔵されているとされる。外資を呼び込みながら鉱山開発やイノベーションによる産業創出を成し遂げることはできるのか。かつての大帝国の行方を今後も注視したい。



◆【視 察】

～Khanbogd Cashmere 社 1 ～

高原 哲也
丸紅(株)中国支社 支社長

モンゴルの主要輸出品であるカシミア製品の代表的メーカーの製造工程・品質管理体制・サステナビリティおよび循環型エコシステムへの取り組み、ならびに地域社会への貢献について把握することを目的に、ウランバートル市内の Khanbogd Cashmere 社の生産現場を視察しました。

Khanbogd Cashmere 社は、モンゴルを代表するカシミア製品メーカーの一つであり、原毛の調達から紡績、製品化まで一貫生産体制を有していた。国内外の有名ブランドへの OEM 供給に加え、欧米の有名ブランドにも素材提供を行っており、日本含め欧米にも直営店舗を有しています。同社の高品質なカシミア素材は、サステナビリティや循環型エコシステムの構築に積極的に取り組んでいる点が高く評価され、数多くのブランドに採用されている理由の一つとなっています。

<会社概要>

設立：1998 年

従業員数：約 700 名（そのうち約 9 割が女性。多くのシングルマザーも従事）

主な製品：カシミアセーター、ストール、マフラー、コート等

認証取得：ISO9001、エコテックス等

工場内の作業＝原毛の選別・洗浄工程、紡績・編立・縫製ラインの視察、検品・仕上げ工程の確認、といった一連の工程を見学しました。

日本製／ドイツ製の最新の設備を導入しており、効率的かつ高品質な生産体制が整っている印象を受けました。現場は清潔に保たれており、各工程で熟練したスタッフが作業を行っておりました。

品質管理体制についても、原材料のトレーサビリティ管理、中間・最終検査体制の徹底、不良品率の低減に



向けた継続的な改善活動に重点が置かれた品質管理体制が敷かれており、特に製品の肌触りや発色の良さに定評があり、品質へのこだわりが感じられました。

また、地元遊牧民とのフェアトレードによる原毛調達を通じた、遊牧民の生活向上に貢献しており、環境負荷低減を目的とした太陽光発電設備の導入含めた省エネ・廃水処理設備の導入がなされておりました。

従業員の約 9 割が女性、シングルマザーも多く従事しており、安定した雇用の提供を通じて女性やシングルマザーの生活安定にも大きく寄与しているとの説明を聞き、サステナビリティや循環型エコシステムの構築に積極的に取り組んでおり、その姿勢が欧米を含む多くのブランド（マック○マーラ、エ○メス、シャ○ル他）に高く評価され、品質に加え社会貢献、サステナビリティへの取り組み姿勢により欧米ブランドでの採用理由の一つになっている旨説明を受けました。

視察の感想としては、工場で働く多くの女性やシングルマザーの方々が、安定した雇用のもとで活躍されている姿がとても印象的でした。

また、遊牧民とのフェアトレードを通じて、地域全体の生活向上にも貢献している点に感心するとともに、欧米ブランド＝需要サイドでもそのような点を重視した調達活動を行っており、ブランド価値向上に繋がっていることを改めて認識するとともに、単なる製造業ではなく、社会や環境に配慮した持続可能なビジネスモデルを実践している企業だと感じました。

尚、同社訪問翌日に視察メンバー5, 6名で（別ブランドではありますが）カシミヤショップにてコートやマフラー等を爆買いした旨、あわせて報告いたします。

◆【視 察】

～Khanbogd Cashmere 社2～

古本 竜一
(株)古本建築設計 代表取締役

今回の広島経済同友会海外経済視察は台風の影響で予定の深圳行の飛行機が欠航になり、翌日に日本出発となりました。各スケジュールを調整しながら我々視察団は、2025年7月24日(木)15時30分過ぎにモンゴル郊外のカシミア製造販売工場、Khanbogd・Cashmere・LLCを訪れました。その日の夕方6時30分に予定されていた、在ウランバートル日本大使館の表敬訪問に時間通り到着するため、ウランバートルの交通事情、車の激しい渋滞を考慮すると、わずか30分程度の視察となりました。

同社の特徴は原材料の調達から製品化までの一貫生産体制にありました。カシミアヤギの飼育、原毛の選別、洗浄、紡績、彩色、縫製まで自社で管理し高い品質が維持され、環境や動物福祉に配慮したサステナブルな生産体制も重視することで、従業員のみならず地元遊牧民の生活向上への貢献にも取り組まれていました。

ウランバートル市内で販売されているカシミア商品は品質とデザインに優れ、コストも安く、視察メンバーの多くが商品を購入し満足していました。特に高原さんはベージュ色でダブルブレストのたっぷりとしたロングコートを羽織り、ゴットファザーの如く、迫力の顔つきでご納得、ご満悦の様子でした。

この後、順調に各スケジュールを終え無事に帰国の途につきました。ただし、広島がこんなに猛暑とは思いませんでした。皆様が購入されたカシミア製品が活躍する季節が早く来ることを祈ります。また、皆様が現地で購入されたモンゴルのカシミア製品が、羽田空港第1ターミナルにて販売されていることをお知らせし、レポートを終わりといたします。



◆【視 察】

～在モンゴル日本国大使館～

野口 隆志
野口ゴム工業(株) 代表取締役社長
村上 英之
三井物産(株)中国支社 理事中国支社長

大使館ではモンゴルと日本の関係を、過去からの流れ、実態に沿って説明を受けたが、初めて認識することが多く、角界で大活躍するモンゴル人力士の頑張りが日本相撲会を支えているだけではない説明は大変示唆に富み、労働人口減少が社会課題となる日本経済の課題解決の一助になる可能性も実感し、大いに向学の機会となった。

視察団を歓待願い、懇親会の際は、大使公邸と言う貴重な場を利用させて頂き、大使以下皆さん気さくにお話させて頂いたことに改めて感謝したい。当日説明の概要は以下通り。



モンゴル国土面積は日本の約 4 倍に対し、人口は僅か 354 万人で首都ウランバートルにその半数が居住、札幌より少し多い程度(ウランバートル市内を少し離れるだけで車窓から見える景色は平原と緩やかな丘陵が続く緑の大地で、雄大さを実感)。モンゴル経済は銅・石炭等の鉱物資源輸出を背景に好調で、貿易収支、GDP も順調に伸長中な一方、更なる成長に向けて外貨収入の 9 割を占める鉱物モノカルチャー経済からの脱皮、IT、再生エネルギー、観光産業等の育成による多角化が課題。地政学的には、中国、ロシアに囲まれ両国が主要貿易相手国とならざるを得ず、上手く付き合うことが生命線。更には北朝鮮も近く、地域唯一の民主主義国家として西側の橋頭保として重要な地域。この点、日本の存在と果たすべき役割は地域の安定に大きな意味を持つことを再認識。

(民主化と日本支援)

1998 年 12 月に若者中心の起きた民主化運動では、自国の将来を担う子供に手を出さないとした旧共産党幹部は、若者と手を取り合い、「共に協力し国を作って行こう」と一人の死者が出ることもなく、投獄者もなく民主化を受入れたのだそう。国民の愛国の強さ、それが、今の発展へと繋がり、モンゴル人のプライドと自信のベースにもなっていると実感。

民主化によりロシア、中国が手を引いた後、日本はモンゴルに手を差し伸べ、最大の支援を行ったと言っても過言ではなく、重要輸出品へと育ったカシミアは日本がカシミア工場を建てたことが切っ掛けで、また、日本では一般的な高等専門学校を設置したこともモンゴル経済浮揚の一助に

なった由。モンゴルの方々が持つ日本への親近感、我々訪問の直前に訪蒙された天皇皇后両陛下への大歓迎の背景がそこにあったのだと認識。

(日本への親近感)

モンゴルの方々は日本大好き。海外旅行経験者で日本未訪問の方はなく、再訪者多く、5-6回は訪日経験がある感覚だそうで、JICAでの説明にもあったが、首相、大統領他政府要人、国会議員には日本留学経験者多く、また、街中交差点で交通整理する警察官から「こんにちは」と日本語で話し掛けられたことは驚き。

先般、モンゴル外務大臣訪日の折には、広島へ足を運び平和記念公園で献花された由。民主主義国家同士として、核兵器不拡散・平和面でも大いに連携可能との説明。

(モンゴル人による日本の社会課題解決)

モンゴル人は世界数学選手権で高得点を叩き出し、ロンドンのチェス世界大会でも活躍、最近は無ノベル賞受賞が伺える人材もあり優秀の由。日本が設置、日本式教育支援を行った高専は今では3校から6校となり、即戦力として活躍願える若者多いにも拘わらず、そうした若者が日本へ向かっていないことは課題との弁。

モンゴルの若者は、米国、豪州等のみならず、積極的に人材確保活動する韓国や中国へ多く流れているようで、積極的に日本も仕掛け作りをすべしとの進言あった。

一方で、最近では、東京都区下の区長、新潟県知事等が直接訪蒙し、モンゴル人材確保乗り出しているとのこと。

(経済面での結び付きと今後)

日本からモンゴルへの輸出は8割が自動車で約1,700億円である一方、モンゴルから日本への輸出は僅か45億円。モンゴルの主要輸出産品、地理的要素を考慮すると現状変更は難しいとの率直な感想を持ったものの、大使館からの説明にあった、韓国はモンゴルを中央アジアに類しており、中央アジア向け輸出基地として考える発想転換あって良いとの意見は目から鱗であった。モンゴルと日本間には投資サービス含むEPAがあり、大使館働き掛けで漸くモンゴル政府がEPA活用に動き出した模様で、追い風として活かせる要素の由。

◆【視 察】

～国際協力機構（JICA）モンゴル事業所 1～

小林 俊介
三菱商事(株)中国支社 中国支社長

1. 総論

JICA モンゴル事務所を訪問し、モンゴル国の概要及び JICA のこれまでの活動についてご説明頂いた。同事務所ではソ連崩壊以降のモンゴルの民主化を支援し、教育、医療、インフラなどの分野で関係を構築してきました。北朝鮮とも関係が深く、親日国であるモンゴルは、わが国にとっても中央アジアの重要国と位置づけられています。今後は日系企業による中央アジア進出の窓口としての役割が期待される。

2. モンゴル国概要について

モンゴルは地政学的にも重要な位置づけとなっている。中国、ロシアの二大国と国境を接し、韓国、北朝鮮とも外交的に良好な関係を保持している。日本の北朝鮮対策でも重要な役割を担う。また、アジア地域で民主主義を確立する貴重な新興国で、日本にとっても東アジアで欠かせないパートナーの位置づけ。

モンゴルは石炭、銅、金やレアメタル等の鉱物資源の輸出を中心に近年経済成長著しく、2024 年の一人当たり GDP は USD6,650、2000 年から 20 倍、年率 6～7% で成長している。人口も順調に増加しており、この傾向は 2100 年まで続く見通し。平均年齢は 28 歳、人口の約 1/3 が 15 歳未満という若い国で、日本の約 4 倍の国土に 350 万人が暮らしている。この人口レベルは日本でいえば静岡県 の同等で、まだまだ成長の余地があると言える。

親日国であり、人口 10 万人あたりの日本への留学生数では世界でトップ。日本語学習者も多く、留学希望先の一位は日本となっている。日本との外交関係では、1991 年に海部首相（当時）が西側諸国の首脳として初めてモンゴルを訪問、以降、総合的パートナーシップ（1996 年～）、戦略的パートナーシップ（2010 年～）と関係を深め、2022 年に岸田首相（当時）との間で「平和と繁栄のための特別な戦略的パートナーシップ」を締結した。

一方で、モンゴルは内陸国であり、その国土はロシアと中国という大国に挟まれているため、常に微妙な外交バランスを保つ必要がある。現にガソリンを中心とした石油製品の輸入を略 100% ロシアに依存している反面、鉱物資源を中心とした輸出の 9 割は中国向け。経済規模が比較的小さい現在はあまり問題にならないかもしれないが、今後成長が続き経済規模が拡大すると、地政学的に両国間のバランス外交が難しくなるかもしれない。国民感情的には嘗ては清朝から独立した、という意識とその後も常に独立を旧ソ連が支援してくれた、という思いからロシアへの信頼度が高い。

3. JICA のこれまでの活動

モンゴルはソ連崩壊後の 1992 年に国名をモンゴル人民共和国からモンゴル国に改称、新憲法を制定し民主化した。その民主化プロセスを支えたのが日本で、ODA のトップドナーとして JICA を

通じて日本式教育の導入（新モンゴル学園、新モンゴル日馬富士学園、日本式高専の設立）や、医療、技術支援を続けている。

JICA として認識している主な課題は、市場経済への移行、非効率な公共サービス改善、鉱物資源牽引型の成長支援、都市一極集中改善、インフラ老朽化、地方格差の 6 点。都市一極集中問題では、現在人口の約半分の 170 万人が首都ウランバートルに暮らしており、ウランバートル自体が元々人口 50 万人程度を想定した都市設計になっていたため、完全飽和状態。都市の拡張、インフラ整備などが



喫緊の課題となっている。その課題の一助として取り組んだのが総事業費 757 億円（うち、円借款 657 億円）のチンギスカーン国際空港の建設、運営で、三菱商事、成田空港、日本空港ビルデングなどと共同で取り組んだ。順調に需要が伸びており、現在拡張に向け準備調査中。

4. 所感

モンゴルに対しては内陸国が故に日本への貿易という観点ではどうしても関心が劣後していたが、近年では同国を中央アジア進出の足掛かりと捉え、モンゴル企業との合弁でカザフスタン等に進出を図る企業も増えているとのこと。事実モンゴル西部の山岳地帯にはカザフ語を話す民族もおり、国境は接していないものの国としては近いものがあるのかもしれない。大使館によれば本邦企業ではアサヒビール、カゴメ、富士フィルム(医療)などが掛る戦略を取っているが、韓国企業はより積極的に進出している。モンゴルにも相当進出しており、コンビニは 2 社、ソウルとの直行便も日に 2, 3 便あるようで、観光客も多く訪れている。国民も以前は日本のドラマが主流だったが、最近では韓流ドラマや K ポップがすっかり流行っており、韓国への留学生も増えている。

大使館や JICA 訪問時の話で最も印象的なのは、工学系人材の育成と取り込みについて。モンゴルには日本の高専を模した高専学校が複数あるが、これは 2014 年に国費留学で日本の高専を卒業したモンゴル人有志数名が中心となって帰国後設立したことに始まる。こうしたモンゴル人学生を高度外国人材として着目する日本の自治体もあるが、多くは他国に流れているとのこと。各国とも将来の IT 人材の担い手としてこうした工学系学生の囲い込みを図っており、折角日本式教育や日本への愛着を持った若者をどのように組織的に囲い込んで日本に連れて来られるか、について今後真剣に検討する必要がある。

5. 質疑応答時のコメント

- ✓ モンゴルは北朝鮮とも友好関係にある。拉致問題ではウランバートルで面会が実現した実績あり。
- ✓ 石油は 100%ロシアからの輸入であるが、最近インド企業の協力で石油掘削を計画。28 年以降生産開始の予定。
- ✓ 輸出の 9 割は鉱物資源。世銀/IMF 等の予想によれば、今後もこのペースで成長が見込まれる。平均年齢も 28 歳と若く、人口の 1/3 が 15 歳未満である為労働力が豊富。人口は 2100 年まで増加する。
- ✓ 10 万人単位の日本への留学生は最多。文法も日本語に近い。日本語学習者も世界トップレベル。街でもちょっとした日本語をしゃべる市民が多い。
- ✓ 1991 年に海部首相(当時)が西側諸国首脳として初めてモンゴルを訪問。以降友好関係を継続。2011 年東日本大震災の際は 3 日後に救助部隊を派遣。全公務員が月給の一部を義援金に。
- ✓ フレルスフ大統領は 26 歳の時 JICA の青年研修で来日。その際青森のホームステイ先の家族を将来モンゴルに招待すると約束。2022 年大統領になって約束を果たす。
- ✓ モンゴル日本病院の開設(徳島大、愛媛大の協力)。日本の技術を活用した医療サービス。富士フィルムの検診サービス等。ドローンを活用した血液の輸送等。
- ✓ 小学校建設の支援。公立学校施設の建設が間に合わず、3 交代で教室を利用。
- ✓ 障害者の社会参加、第四石炭火力のリハビリ、ゲル地区への上水道整備。

◆【視 察】

～国際協力機構（JICA）モンゴル事業所 2～

松田 哲也
ヒロマツホールディングス(株)
代表取締役会長兼CEO

Sect.1：吉村徳二次長 「特別な戦略的パートナー モンゴル」ご講演

1. モンゴルの地政学

中国、ロシアの二大国のみと国境を有する内陸国。中露の他、韓国・北朝鮮とも外交的に良好な関係を保持している。横田夫妻と孫との面談場所にウランバートルが選定されたことに象徴される。かつては社会主義であったが現在は資本主義経済に移行した歴史的背景もあり、アジア地域において民主主義を確立維持する数少ない新興国、日本にとって東アジアの安定に欠かせないパートナーとの位置付けとなる。

2. 経済的な魅力

輸出の約9割は石炭、銅、金やレアメタル等の豊富な鉱物資源。一人当たりのGDPはまだ低い、近年の経済成長率は安定して年6～7%を保持している。人口は350万人だが若年層が多く、2100年以降まで人口増加傾向であり、国を支える労働人口も増えていくことで、今後も経済規模の拡大が見込まれる。

3. 親日なる国民性

述語が文末・母音が7つと、アルタイ語系のモンゴル語と日本語とは文法構造が近く、両語は類似性が高く学びやすい関係にある。日本は長年モンゴル最大の援助国として多岐に亘るODAを実施し続けており、日本への感謝と存在感がモンゴルにしっかり根付いている。

日本への留学者数人口比では世界一位(2023)、10万人当り400人以上と日本語学習者も世界トップレベル、留学希望先第一位は日本、国民の76%が日本を信頼できると回答。世界トップクラスの親日国であり、先般天皇陛下が来られたときも国全体で歓迎している空気だったそう。

4. 第3隣国としての政治的パートナーシップ

70年間続いた社会主義を放棄した後、西側諸国の首脳として初めてモンゴルに訪問したのが日本(1991年、海部総理)。以降はパートナー関係を深め2022年(岸田総理)より平和と反映のための特別な戦略的パートナーシップを締結。東日本大震災時(2011年)はモンゴル政府職員全員が1日分の給与を義援金として寄付、緊急援助隊も震災3日後に世界で一番早く日本へ派遣。

オフナー・フレルスフ大統領は26歳時JICA青年研修で来日し青森県の家庭にホームステイ、そして2022年、大統領として当時のホストファミリーをモンゴルへ招待。サンダンシャ

タル首相は国会議長時代「日本のように発展しよう」というスローガンを掲げ、議員向け勉強会を 11 回実施。更には国会議員の 1 割が日本留学組で知日派が多い。

5. 日本式に対する揺るぎない信頼

日本式高専をはじめ元横綱日馬富士が設立した新モンゴル日馬富士学園という日本式教育、医療や検診サービス、またチンギスハーン国際空港は円借款により建築され、三菱商事や JAL 子会社等が出資して運営。世界の空港格付「skytrax」で 4 スターを獲得する(2024)等、建設だけでなくマネジメントも日本クオリティー。日本式経営を学ぶ研修も常に盛況で、日本式マネジメントは人気が高い。

6. 課題認識と協力の方向性

市場経済以降、非効率な公共サービス、鉱物資源牽引型の成長、都市一極集中、インフラ老朽化、地方格差、以上 6 つが特徴的な課題。特に都市一極集中が最も悩ましい課題であり、人口 350 万人中ウランバートルが 170 万人、二番手の都市が 8～9 万人程度という格差。モンゴルは大草原のイメージだが、首都は慢性的大渋滞、極寒の冬は石炭で暖を取るため大気汚染も深刻。環境や気候変動への適応を図りながらガバナンスを強化し、公共財政の規律強化、金融システムの育成、インフラの整備をはじめとした産業多角化を推進し、都市問題や地域格差の是正を目指している。

7. JICA の貢献

先出の空港や高専をはじめ JICA からの資金や技術への貢献度は高く、特に JICA 海外協力隊は現在 40 名以上の退院がモンゴル国内で活動中(派遣国中最大規模)。工学系人材育成(MJEED)といったエンジニアの育成事業や障害者の社会参画、生活困窮者の自立支援、更には砂漠化防止・草地回復等、協力は多岐に亘る。

8. 主要な日本企業

モビコム社 1999 年に住友商事と KDDI が合弁で設立、市場シェア 40%強を占めるモンゴル最大の携帯電話事業者。ハーンバンク(旧モンゴル農業協同組合銀行) 2003 年 HS 証券(現澤田ホールディングス)がハーン銀行の 100%株式を取得、モンゴル最大の資産を誇る商業銀行に成長。

9. その他進出企業の動向

商社(三菱、三井物産、伊藤忠、住友商事、丸紅)、IT(電通データアーティストモンゴル、ユニメディア、GMO)、製造・農牧・小売(賛光精機、新潟農商、新潟クボタ、キャンドゥ、ファームドゥ)、飲食業(たけさんラーメン、味仙ラーメン、町田商店、吉野家、松屋、ベアードパパ)、観光業(HIS、東横イン)。

拠点総数 172 社(2022 年)、在留法人数 365 名(R5 年)、貿易額は約 688 億円(日→モ: 641 億円、モ→日 47 億円)

10. その他

戦後 12,000 人もの日本人が抑留され、スフバートル広場や国会議事堂、オペラ劇場等の建設に従事。資本主義時代に入り JICA を通じて有償無償の技術協力を受けてきたが、2050 年には ODA も必要なくなる見込み。しかし技術力に乏しいので今後は有償資金協力を民間ベースの報告に移行するのではと想定。石炭(火力発電)に頼るエネルギーから今後は再生エネルギーについても民間投融資で実施している。地熱や水力も今後有力ということで調査中。

Sect.2 : ' HIS MONGOLIA ' LLC Executive Director Mr. Osamu HARADA を交えての意見交換

広島市安佐南区出身。大学卒業後は約 16 年間ウランバートルに居住し、ビジネス領域である観光業の発展に尽力される一方で、JICA 日本人会 170 名の会長として生活面や現地邦人のネットワーク構築にも献身。今回は事業的な面だけではなく「住民」としての視点でも所見をいただいた。

1. 農業の方向性

未だ多くは昔のスタイルにて放牧を展開しているが非効率であり、大規模で効率を重視した定住・集約型な農場を民間企業にて進行。

2. インフラについて

大都市一極手中にて緊急車両も通れないほど慢性的な交通渋滞。ウランバートルを囲むゲル地区をはじめインフラも整っていない。上水も 30%は行き渡っておらず水飲み場から採取。暖房設備もなく冬は石炭を燃やして暖を取ることが主流のため大気汚染も深刻。

3. 日系の進出企業、特に製造業が少ないこと

労働力が少ない上、東南アジアに比べて内陸国にて単体であり、ロシアか中国を通さないと運べない。そのリスクを冒してまで進出する企業はやはり乏しい。また寒冷地でもあり冬は身動きが取れず気候的条件も厳しい。

4. 韓国の脅威

もはや韓国の存在感は日本より大きい。コンビニやスーパー、コーヒーショップ、パン屋の大手はほぼ韓国企業。韓国人の労働者は約 5 万人、直行便も一日数便飛んでおり、往来する数が日本とは段違い。90 年代は日本のドラマが主流だったが今はほぼ韓国ドラマ。モンゴルは市場が小さいところを逆にチャンスと捉え韓国は目をつけている。ワーカー自体が家族一族を引き連れてくる国民性で勢力を伸ばす。

5. ロシアのウクライナ侵攻による影響

マクロ的には大きな影響はない。

6. モンゴルへの投資

経済成長も順調だが、同時に物価や賃金も同様に上昇している。今年はいずれも一桁で落ち着きそうである。モンゴルのネックは冬が都市部では空気が悪くなり郊外は厳寒、つまりインバウンドが激減する。夏はインバウンド、冬はアウトバウンドな人の動きを模索すべき。国民性としても、最初は威勢がよいが長続きしない性質なので、きちんと進捗管理を続けていくこと、何より任せるのではなく現場で仕切れる人材が必要。ジャパンフェスティバル等も定期的に関催、親日で距離も意外と近いので、ぜひ進出の機会を探してほしい。

Sect. 3 : 所感

モンゴルの事前知識は、チンギス・ハーン、ゲルで暮らす遊牧民、そして大相撲、といった浅薄なものでしかなかった。しかし実際に現地に立ち、首都ウランバートルの活気と洗練さに驚き、また過度な人口集中による住宅・交通・環境・災害時の脆弱性が顕在化していること、つまりは都市化による課題が発生していることも目の当たりにした。何よりタクシーに至るまで日本語を操るドライバーが居るほど世界一の親日国であること。これは過去の政治



活動や現地居住者の誠実な行動の積み重ねであり、日本人として誇らしく感じた。一方で、日頃日本に住む我々は、他のアジア諸国と比べ地政上や小規模市場にてモンゴルに無関心であり、今後は今回のテーマでもある「特別な戦略的パートナー モンゴル」を民間レベルでも具体的に推進できるよう、体験した我々から実践していくことが求められると思料する。総じて、若者が多く躍動している大都市ウランバートルの経済発展、そして圧倒的な大自然・大草原の遊牧民の純粹さ、いずれも貴重な体験であり投資を検討しても良いほどモンゴルは現代も未来にも魅力溢れる国であった。

◆【所 感】

～両陛下のモンゴルご訪問、親日感加速～

三山 秀昭

広島テレビ放送㈱ 顧問、広島大学特別招聘教授

モンゴル訪問のレポートは私が連載している月刊誌「リベラルタイム」10月号（9月発売）の「ブランチにコラムを」に書いた。コラムは96回を数え、ブログ「徒然エッセイ」(<http://pict-dd.cocolog-nifty.com/tsurezure/>)は125回と続いている。これを同友会の報告書に転載する。私に課された宿題と少し切り口が違うが、お許し願いたい。

天皇、皇后両陛下によるモンゴル御訪問（7月6日から）を受けた下旬にモンゴルを訪れた。広島経済同友会の視察の一環、私は初訪問だった。もともと親日的な国だが、両陛下の訪問でそれが加速していることを実感した。

日本人にはモンゴルと言えば「多くの大相撲の力士を輩出している国」というのが最初の反応だろう。「歴史の授業で蒙古襲来（元寇）を学んだ」が加わる程度だろう。そこでモンゴルの基本情報を整理したい。①面積は日本の四倍、ロシアと中国に囲まれた内陸国②人口三百五十四万人、人口密度は世界最少。半数近くが首都ウランバートルに一極集中、残りの多くは遊牧民③国土の八割が草原地帯、羊、牛、馬などが自然放牧され、その数六千五百万頭④遊牧民は牛革製の「ゲル」というテント風の家に住み、年に数回移動する。「二、三人で三時間あれば組み立てられる」とか⑤金、銀、銅、石炭、レアアース、ウランなど鉱物資源が輸出額の八七%を占め、その九割が中国向け。輸入は中国四〇%、ロシア二四%。日本は一〇%で中古車を含めた自動車、大半がトヨタ製だった⑥モンゴル語はロシア語に似たキリル文字、若者は英語、中国語、日本語への関心が高い⑦政治体制は冷戦崩壊後に民主化され、大統領と一院制国会が並立する。



両陛下の外国訪問は即位後、一昨年 of インドネシア、昨年 of 英国に次ぐ。今回の訪問先がモンゴルになったのは「陛下の強い要望」（外務省の大使経験者）。戦後八十年の節目に硫黄島、沖縄、広島、長崎など一連の「慰霊」の意味がある。終戦時、旧満州や朝鮮半島では日本兵や在留邦人がソ連軍に拘束され、五十七万五千人が「シベリア抑留者」として極寒の地で森林伐採や道路建設などの強制労働に従事させられ、五万五千人が死亡。モンゴルには一万四千人が連行され、二千人が亡くなった。現存の政府庁舎や国立オペラ・バレエ劇場は抑留者により建設されたもので、両陛下の歓迎式典は政府庁舎前のスフバートル広場で行われた。両陛下は日本人慰霊碑で「心ならずも故郷か

ら遠く離れた地で亡くなら方々に思いを致したい」とに追悼された。海外抑留地での慰霊は初めて。ロシアでの慰霊が政治的に不可能な中、モンゴルの抑留犠牲者への慰霊の意義は重い。

両陛下がチンギス・ハーン空港に降り立たれた際、歓迎の印として差し出された「アーロール」という乳製品のお菓子を口にされたことがモンゴル国民に親しみを感じさせたようだ。モンゴル最大の祭典「ナーダム」の開会式に出席され、伝統楽器「馬頭琴」の演奏も楽しまれた。日本発祥の高等専門学校「新モンゴル学園」で学生たちとも交流された。

「両陛下の訪問は日本との友好促進の歴史的金字塔となった」との声を耳にした。「モンゴルの広大な土地にまかれた（友好の）タネを若者たちがさらに高みに育てていくことを願う」という天皇陛下のお言葉が共感を呼び、モンゴル人の親日感のアクセルになっていた。近年増えている日本への留学生がさらに増える契機になりそうだ。

モンゴル側関係者は「両陛下の訪問準備は昨年春から始まった」と明かした。実は昨年8月に岸田文雄首相が訪問する予定だった。しかし、「南海トラフ地震臨時情報」が初めて発令され、数日前に中止になった経緯がある。モンゴル側にとっては両陛下の訪問は「待ち望んだ」出来事だったのだ。

モンゴルは2015年にスイスのような「永世中立国」を目指した。中露に囲まれた地政学上の選択だったがほどなく頓挫した。以降、欧米、韓国、日本との交流拡大を目指しているが、韓国が観光、貿易で日本より先行している。劇場で民族舞踊を見たが、舞台袖の字幕はモンゴル語、英語と韓国語だけだった。ウランバートルは高層ビルが林立し、建設ラッシュ。しかし、日本製のクレーンを見ることがなかった。中国、韓国の投資が目立った。「親日的」を越えた課題がモンゴル、日本双方のありと感じた。

◆【所 感】ウランバートル郊外

～蒼きモンゴルの夜空～

山根 近

久福汽船(株) 代表取締役

コロナ禍が明け、久しぶりに広島経済同友会の海外視察旅行に参加した。訪問先は中国・深圳、そしてモンゴルの首都ウランバートル。鄧小平の改革開放の象徴として急成長を遂げた深圳と、かねてより憧れていた雄大なモンゴルの大地。この二つを一度に訪ねられるまたとない機会に、出発前から胸が高鳴った。

私は報告の担当として「ウランバートル郊外」を割り当てられたが、せっかくの機会にどうしてもやりたいことがあった。それは「満天の星空をモンゴルの草原で眺める」こと。長年の夢を叶えるべく、思い切って個人（プラス数名）でテレルジ国立公園への1泊2日のツアーに参加した。

出発の日、ホテルのロビーに現れたのは、若い女性ガイドだった。日本のアニメをきっかけに独学で日本語を学び、留学まで経験したという。流暢な日本語で自己紹介する姿に驚かされると同時に、遠い国で日本への関心が根付いていることを嬉しく思った。しかも彼女のホームステイ先は、偶然にも広島カープの関係者の家だったという。不思議な縁を感じた出会いであった。

車で1時間半ほど走ると、視界は一気に広がり、どこまでも続く草原が現れる。遠くに岩山や川が見え、青い空の下に白いゲルが点々と並んでいた。まず訪れた遊牧民のゲルでは、木の骨組みにフェルトを重ねた簡素ながらも合理的な住まいを体験。中央のストーブには火が燃え、乳製品を使ったミルクティーやお菓子が振る舞われる。何世代にもわたり続く遊牧の暮らしを垣間見て、土地の厳しさと人々の知恵に感心した。



続いて高さ25メートルの「亀岩」を見学。長年の風雪に削られ、まるで巨大なカメが草原に腰を下ろしたように見える奇岩だ。近くでは鷹を腕に留まらせる体験もあり、草原ならではの野趣あふれる一幕だった。さらに奥へ進むと、岩山に抱かれるように建つアリヤバル寺院に到着。参道に並ぶ看板には仏教の教えや人生訓が書かれており、一步ごとに心が整っていく。山腹でマニ車を回すと、風によってカラカラと響く音が、どこか祈りの声のように感じられた。

夕方には馬術ショーが始まった。民族衣装に身を包んだ騎手が小柄ながら力強いモンゴル馬を操り、全速力で駆け抜ける。馬上での逆立ちや弓矢の妙技は圧巻で、観客の歓声が絶えなかった。続く

乗馬体験では、自ら馬にまたがり草原を進む。小さな馬の背中頼もしく、丘を越え川を渡るたびに、まるで自分も遊牧民の一員になったような気がした。鮮やかな刺繍の民族衣装を身にまえば、その気分はさらに高まる。

そしていよいよ夜。待ちに待った星空観察の時間である。新月直前という好条件を選び、体調も整え、準備万端で臨んだ。しかし天は気まぐれで、夜になると遠くの地平線に稲光が走り始めた。最初は線香花火のようにかすかだった光が、次第に大きく広がり、やがて「バリバリッ」と大地を震わせる雷鳴とともに頭上を覆う。青白い光に混じり、橙や赤の稲妻が空を裂き、空一面を光で埋め尽くす。その迫力はまるで自然が織り成す大規模なショーであった。結局、満天の星は見られなかったが、代わりに一生忘れられない雷雨体験を得ることができた。夢は叶わなかったが、「またモンゴルに来ればいい」という新たな理由を与えられたように感じる。

翌日はチンギス・ハーンの巨大騎馬像を訪問。高さ40メートル、ステンレスの馬にまたがる姿は太陽を反射して輝き、モンゴルの象徴そのものだった。内部の博物館で歴史を学び、馬の頭上に登れば、遥かに広がる草原の光景が目飛び込んできた。



旅を振り返ると、モンゴルの自然と文化の豊かさに加え、韓国の存在感が強く印象に残った。街の看板にはモンゴル語と

並びハングルが目立ち、観光客も多い。資源開発や建設分野での企業進出、人的交流の積み重ねが背景にあると聞いた。日本が慎重に構えている間に、韓国は着実に関係を深めてきた現実を突きつけられた思いがする。

深圳の発展、モンゴルの資源と文化、そして近隣諸国の動き。今回の視察は単なる観光にとどまらず、アジアのダイナミズムを肌で感じ、日本のこれからの立ち位置を考える契機となった。何よりも、草原で過ごした一夜の雷雨体験は、自然の大きさと人間の小ささを実感させ、旅の記憶に深く刻まれている。

◆【所 感】

～モンゴルの食～

狩野 牧人
(株)恵泉ホールディングス 代表取締役
松井 健
三井不動産(株)中国支店 支店長

<モンゴル料理：夕食編>

モンゴル初日の夜、Modern Nomads というレストランで、モンゴル料理をいただいた。

メニューは「ハマグ・モンゴル・セット」で、内容は次の通り。

- ① スーテーツァイ：塩味のするミルクティー。おもてなし用の揚げパンとヨーグルトも一緒に出てくる。揚げパンもヨーグルトも全く甘くない。揚げパンは硬め。
- ② 野菜サラダ：キュウリ、レタス、トマト等が入っていてシンプルな味付け。
- ③ コンソメ風スープ：香辛料とコショウが効いていて美味しい。
- ④ ホーショール：肉を包んでカリッと揚げた大きな餃子。中はおそらく羊肉。思ったより大きくてボリュームがある。ピクルス系のピリ辛サイドディッシュ付き。

- ⑤ ホルホグ：羊肉をメインに、じゃがいも・人参などの野菜と一緒に鍋に入れて蒸し焼きにするモンゴルの国民食。モンゴルはラム(子羊)ではなくマトン(成羊)を使用するので、羊肉の旨みが好きな人には好評だったが、口に合わない方もいた様子。

- ⑥ チョコレートアイス



<モンゴル料理：昼食編>

モンゴル2日目の昼、Bull Hotpot というレストランで、モンゴルしゃぶしゃぶをいただいた。店

内は満席で、店の外には入店待ちの行列ができていた。

席に着くとテーブルは既にコース料理がセット済み。テーブルにはIHヒーターが埋め込まれていて、一人に一鍋が用意されていた。

コース料理：スープ、味付けキュウリ、牛のひれ肉、羊のもも肉、馬肉、牛の腎臓肉、野菜盛り合わせ、チャーハン、餃子、肉団子、メの小麦麺、薬味（パクチー、ネギ、にんにく甘酢漬、唐辛子酢漬け）

肉は極薄切りでどれもおいしく、野菜も新鮮で種類が豊富。たれはしょうゆベースの甘めのたれと、濃厚な胡麻だれが小皿に入っていた。チャーハンは薄味で普通に美味しい。メの麺はやや硬めで日本より長めに茹でる必要があった。

デザートに水色とピンクの鮮やかな 2 色シャーベットが出てきた。見た目から、かなり甘いアイスイメージしたが、思いのほかさっぱりしていて美味しかった。



<その他の料理>

モンゴル2日目の夜は、在モンゴル日本国大使館にてバイキング形式の日本料理をいただいた。



モンゴル3日目(最終日)の昼はChojin Temple Restaurantというレストランで地中海料理を、夜はウランバートルの最高級ホテル「シャングリラ」内のHutongというレストランで中華料理をいただいた。



◆【所 感】

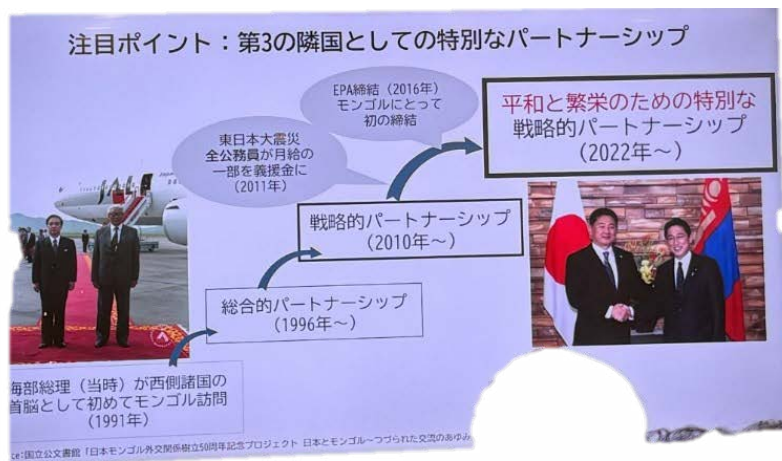
～モンゴル雑感 1～

榎本 暢之
(有)エノモト 代表取締役

「モンゴルに行ったことがない。」これは私が今回視察団に参加した動機です。

広島経済同友会、経済視察団の一員としての参加でした。観光用ゲルを見たりしましたが JICA の事務所にてモンゴルと日本の特別なパートナーシップについてのレクがありました。写真に 1991 年に海部総理（当時）が西側諸国の首脳として初めてモンゴルを訪問したそうです。パートナーシッププランクも上がり 2022 年には「平和と繁栄のための特別な戦略的パートナーシップ」を締結したと岸田首相の写真がありました。

二人とも早稲田大学の出身で海部先生は初代の NPO 法人日本ティーボール協会長でもあります。現在岸田先生は日本 TB 協会の特別顧問であります。同格に王貞治氏川崎のぼる氏がいらっしゃいます。



ザンダンジャタル首相と岸田総理の写真もありました。徳島県でモンゴル名誉領事を務めていらっしゃる河内（かわうち）さんから電話で「親友が首相（ザンダンジャタルさん）に任命された」と聞いていましたがこんなすごい実績（元国会議長）の方だとは知りませんでした。



私はNPO法人日本ティーボール協会常務理事でありアジアティーボール連盟の理事でもあります。徳島県の河内さんはアジアティーボール連盟会長でもあります。2年前に初めてお会いしました。旧西武ドームのNPO法人日本ティーボール協会主催の大会にモンゴルから2チーム（小学生）招待されました。舞踊や二胡等の文化を披露する方々も一緒です。昨年は徳島県阿南市で開催されたアジア大会（徳島県阿南市）に5チーム（小学生）を招待しました。今年も8月に阿南市で開催されます。今回も6月に予選大会（ウランバートルにて）を行い参加5チームが決まっていると聞いています。

河内さんは専修大学野球部卒だそうで野球が大好きです。がしかし野球をする為に留学をしようにも高校生からでは間に合いませんレベルが違いすぎるからです。そこで小学生のうちに日本野球（ティーボール）を見せてレベルの違いを実感し基礎練習を積みます。数名の留学生を私費で受け入れて高校野球を経験して卒業したら四国ILリーグに入れてもらいプロ野球を目指してもらおうです。夢破れたときは経営している会社で留学生を受け入れる積りと聞いています。

二人の元首相からティーボール、徳島県の方の紹介へと話が変わりましたがご容赦ください。私の生業ではモンゴルとのかかわりを持つことは叶いませんが徳島県のスケールの大きな河内さんに協力してスポーツ（ティーボール）でモンゴルとの懸け橋になって行きたいと思っています。

後日談ですが、大上モンゴル名誉領事とティーボールについて連絡は取り合っていました。ティーボールのオレンジボール半ダース、教本をモンゴルまで持参していましたが大上さんに託しました。帰られた大上さんが東京でモンゴル大使館に届けていただきました。

オレンジティーボールを持参した理由があります。これは低反発球です。インドアでプレイすることができます。モンゴルのスポーツが盛んでない理由に考えられるのは冬季の寒さが厳しすぎると思われます。野球は夏のスポーツだと思えます。オレンジティーボールは体育館の中で使用することができますので少し工夫すれば練習にも試合にも使えます。大いに活用してもらいたいです。



◆【所 感】

～モンゴル雑感2～

廣江 裕治

(株)広島銀行 取締役専務執行役員

香港から空路ウランバートルに到着して最初の感想は、「涼しい」でした。モンゴルは一日の寒暖差が大きいと聞いていましたが、湿度が低いこともあり、朝は清々しく、日中も最高気温が25℃程度で、とても過ごしやすい気候でした。

ウランバートルの街中は、移動の手段がバスと自動車に限られており、渋滞が激しく、少しの距離を移動するのに時間も要しました。工場見学の時間よりも移動時間の方が長いといった具合です。人口350万人の半数の170万人がウランバートル市民という、人口の一極集中の極みで、明らかにインフラが遅れているといった印象でした。

街を走っている車は日本車が多く、とくにトヨタのプリウスが圧倒的に多いという感想を受けました。実際、日本車のシェアは7割程度あり、そのうち半分はトヨタ車です。日本から輸入した中古車がほとんどで、多くの右ハンドル車が右側通行の道を走っている光景は、不思議な感じでした。

街のいたるところに電動のレンタルバイクが並んでおり、市民の足として縦横無尽に走り回っていました（歩道を走ります）。コンビニエンスストアも街中に沢山ありますが、CU、eMart24とう韓国系が目立ち、稀にセブンイレブンを見かけるといった具合です。

一方郊外にでると、見渡す限りの草原で、ときおり現れるゲルの周辺では牛、馬、羊、山羊といった家畜が放牧されており、遊牧民族の国というのを体感しました。

遊牧民の住居であるゲルは、木材の骨組みの周りをフェルトで囲み、その上からシートをかぶせ、ロープで固定してあります。結構しっかりとした造りに見えましたが、住民は約1～2時間で組み立てるとのことでした。訪問したゲルの家長によると、年に4回以上は引っ越すようで、なるほど手慣れたものなのだなと感じました。



当然ながら、電気はきておらず、水は近くの井戸まで地下水を汲みに行きます。ただ、われわれが訪問したゲルの前には太陽光パネルが置いてあり、電気を使っていました。（ゲルの中に携帯電話やゲーム機がありました）

ゲルに入るとおもてなしとして、「嗅ぎたばこ」をいただきました。粉末状のタバコの葉を手の甲

に載せ、鼻から吸引するスタイルのタバコです。吸っている姿をはたから見ると若干違和感を覚えました...

馬乳で作った馬乳酒もいただきました。遊牧民の伝統的な飲み物で、アルコール度数は3%程度です。強い酸味に加えチーズのような香りで、クセになる(?)味でした。ビタミンCやカルシウムが豊富で、野菜が不足しがちな遊牧民の栄養源として重宝され、子供から高齢者まで飲まれているようです。日本のカルピスは、その創業者が馬乳酒を飲んだ経験をもとに開発したとされ、カルピスのルーツとも言われています。

また、われわれの訪問直前にモンゴルを訪問された天皇皇后両陛下が空港に降りたたれた際に口にされた、モンゴルの伝統的なお菓子、「アーロール」もいただきました。乾燥させた乳製品で、とても硬く、チーズのような風味はあるものの、甘みはまったくありませんでした。保存性が高く、栄養価もあるため、遊牧民の携帯食やおもてなしの品として重宝されているとのことでした。

今回私はゲルに宿泊できませんでしたが、泊まれた方のお話を聞くと、夜は満天の星空で、人工衛星が何基も見られるほどだったとのことでした。次回はぜひゲル泊に挑戦したいと思います。

広島から行くには少し遠いと感じますが、欧米に行くことを思えば、近い国です。中国とロシアに接する内陸国のため日系企業の進出はまだまだ少ないですが、朝青龍、白鳳関をはじめとする多くの横綱を輩出するなど、国民の多くは親日といわれています。広島にはモンゴル国名誉領事館が設置されており、今後の広島ーモンゴルの交流活性化に大きな期待を抱かせる視察となりました。

～おわりに～

広島経済同友会
中国（深圳）・モンゴル（ウランバートル）経済視察団
副団長
山本慶一郎
(株)中国新聞社 社主兼専務取締役

見渡す限りの大草原が広がった騎馬民族の国。その国のイメージは誰もが思い浮かべることができる。しかし旅行の予定はおろか、訪れたことのある人に出会うことも滅多にない。近いようで遠い国・モンゴル行きを着想したのは、広島経済界の若手経営者であり地場運送業大手(株)ロジコムホールディングス大上正人社長のお陰だ。

1994年に広島開催されたアジア大会がきっかけで、大上氏と先代のお父様は長らくモンゴルとのご縁を育んできた。その友好関係から、大上氏が在広島モンゴル国名誉領事館の名誉領事を拝命することが決まった。「着任に合わせてモンゴルを訪れるため、同行して欲しい」。そう大上氏に誘われるままに25年1月末から弾丸で厳冬期のモンゴルを訪れ、バトツェツェグ外相をはじめとする関係者との懇談に同席させてもらった。冬季のウランバートルは-30度ほどにもなる厳しい環境だったが、現地の経営者からご自宅のパーティに招かれるなど心温まる歓待を受け、初訪問ながらたいへん良い印象を抱いて帰国した。

「地元経営者とモンゴル政府のご縁ができた今、広島経営者団体でバックアップして、そのご縁を太くしてはどうか」。帰国後に開いた国際委員会でそう提案したところ、多くの会員からの賛同を得ることができた。総合商社の各支店長をはじめとする国際経験豊かなメンバーでも、モンゴルを訪れたことのある方はおらず、好奇心が掻き立てられたことも皆の興味をひくポイントであった。委員からは「ロシアと中国という二つの超大国と国境を接しており、Identityに苦労しているであろう資源大国の実情を見たい」などの意見も寄せられた。

もうひとつの訪問先である中国行きのアイデアは、リコーの中野支店長からのご提案であり、同氏とリコー本社の山下会長とのやりとりがきっかけで深圳にある最先端工場の視察が実現したことをこの場に記しておきたい。現地や関係各所との調整で、多くのお力をお借りしたことに対し深く感謝を申し上げる。

深圳は中国のシリコンバレーにも例えられるが、街の歴史は古くない。「古ぼけたビルと超高層ビルが隣り合わせで、つぎはぎだらけの街区が並んでいるのだろう」。そうした先入観を持って入国したが、発展の度合いは想像を大きく超えていた。中国のグローバルIT企業の多くが本社を置く大都市という知識はあったが、空港から街中にいたるまでのロードサイドは丁寧に緑化され、そこかしこに花が植えられている。建物や設備、走っている車まで新しく、目にする全てが最近更新されたばかりのように見えた。特に自動車では、数年前までそれなりのシェアを維持していたであろう日本車勢がほぼ姿を消し、見たこともない中国製EVが路上を埋め尽くしていたことに衝撃を受けた。そうした中でもリコーが同地にグローバルの生産拠点を構え、数千人の雇用を抱えていること

は勇気づけられた。街角から日本企業の看板が姿を消しつつあるというが、大きな存在感を維持し続けて欲しいと切に願っている。

中国にはわずかな時間しか滞在できなかったが、その後のモンゴルでは想定通りの日程をこなすことができた。7月の気候は20度台と、前回訪れた1月時点から50度近く変化し、一面の氷の世界から大草原に生まれ変わっていた。

日程中には在モンゴルの日本大使館を訪れ、井川原大使から温かい歓待の食事会を開いて頂いた。我々の訪問の10日ほど前には天皇陛下も歴史上はじめてモンゴルへご訪問になられており、その余韻も冷めやらぬタイミングだった。井川原大使は訪問時のご挨拶で、モンゴルがかつて苦境にあえいでいた時代に手を差し伸べて、1990年に民主化する流れを決めたのは日本だったと指摘。市場経済移行時にも大きな役割を果たしたといい、「モンゴルの将来を真剣に考え、最大の支援を差し上げたのが日本とあって差し支えない」と教えて頂いた。

モンゴルは1991年の民主化直後、当時の海部総理が西側諸国の国家元首として初訪問して以来、外交面で親密な関係を育んでおり、岸田文雄総理時代の2022年には「平和と繁栄のための特別な戦略的パートナーシップ」を締結している。2019年に独立系PR会社エデルマンが行った対日世論調査結果では、87%の国民が「日本と友好関係にある」、76%が「日本を信頼できる」と回答している。外務省の調査では留学希望先の一位は日本で、日本への留学者数も人口比で圧倒的な世界一だ。ここからは民間同士の力で、今回の訪問をてこにして、広島とモンゴルをつなぐビジネスを後押ししていきたいと、あらためて感じた。

今回の視察では初日の羽田発深圳便が台風で欠航になるなど想定を超える様々な出来事があったが、たびまちゲートさまの調整力で何とかスケジュールをつなげられた。多少の変更があったものの深圳、香港、ウランバートルと予定されたルートを完走することができたのも同社のお陰である。いつも陰ながら助けて頂いていることにあらためて感謝を申し上げたい。ありがとうございました。